

Contents

特集：続・イラク戦争の展望	1p
<最近の”New York Times”から>	
"Scorecard for the War" 「戦争のための星取表」	6p
<From the Editor> 「天王山の戦い？」	7p

特集：続・イラク戦争の展望

イラク戦争が始まって2週間。「イラクの体制はトランプでできた城のようなもの。指でつつくだけで倒れる」的な超楽観論は否定されましたが、それでも現状は「普通の楽観シナリオ」の範囲内にあるように見えます。

他方、超楽観論の否定とともに、ブッシュ政権内ではラムズフェルド国防長官への批判の高まりなど、政治力学に微妙な変化が見られます。イラク戦争遂行の中心勢力となっている「ネオ・コン派」に対する風当たりも強くなってきたようです。

今週も先週に引き続き、イラク戦争と米国政治の動向を追いかけてみます。

劇場型戦争の見えない部分

最初に、今週のイラク戦争について概観しておきたい¹。

今回のイラク戦争は、戦場の映像が遠慮なく全世界に届けられる「劇場型」である。情報の量だけは多いけれども、重要な部分はあまり見えない感が強い。「テレポリティクス化」によって、むしろ政治の本質が見えにくくなっているのと同様に、「テレビで報道されるから、戦争がかえって見えにくくなる」という面があることは否定できない。

端的に言うと、従軍記者が南方戦線に集中しているために、戦闘はほとんどイラク南部で行われているような印象を受けるが、実際には北部と西部でも戦闘は行われているはずである。

¹ 以下の分析に関しては軍事ジャーナリスト、芦川淳氏の意見を参考にさせていただいた。

- (1) 北部はキルクーク油田が焦点である。また、フセインの生地であるティクリートは、「最後に逃げ込む場所」とされるが、これもバグダッド北方にある。ゆえにイラクは北部に2個師団の共和国防衛隊を配備しており、南部よりも北部重視の構えを取っていた。米軍の精鋭第4師団がトルコから入れなかったことは、イラクにとっても予想外（望外？）の展開であったのだろう。では、北部でイラク軍と米空挺部隊+クルド人勢力との間でどんな戦闘が行われているかといえ、ほとんど情報がない。
- (2) 西部戦線も重要な意味を持つ。イラクからヨルダンへの陸路を断つ、イラクによるイスラエル向けミサイル発射という危険を取り除く、バグダッドの西方70キロ地点に、3000メートル級滑走路を持つタッカダム空港があり、これを米軍が確保すれば、以後の補給が一気に楽になる、などの理由がある。ゆえに西部における特殊部隊の活動が果たす役割は大きい、これもほとんど報道がされていない。

ちなみにバグダッド市街戦があるかどうかは現時点では予測できないが、少なくとも首都近郊の空港（南方40キロ地点にもアレクサンドリア空港あり）を確実に押さえて整備することが、米英軍にとっては必要最低条件となるだろう²。
- (3) 今週、南部の要衝カルバラにおいて、開戦以来最大規模の地上戦が行われた。共和国防衛隊が南下してきたものを米英軍が撃破した形である。正直なところ、イラク側の作戦には疑問符がつく。なぜなら、戦車戦は「少しでも強い方が大差で勝つ」のが常識であり、制空権も米英側が握っている。メディナ機甲師団などはイラクにとっては「虎の子」の部隊であり、損傷した場合にスペアはない。精鋭部隊は首都決戦のために温存した方が賢明だったはずだし、少なくとも米英軍はその方が嫌だったはずである。
- (4) ところで空爆の結果、イラク軍の通信系統はかなり麻痺しているか、あるいは信頼度が低下した状態であると推察できる。となれば、バグダッドはどうやって戦況を把握しているのか。おそらくはCNNで情報を得ているのではないだろうか。通信手段は駄目になっても、放送手段は生きているのである。となれば、彼らもまた「戦争は南部だけで行われている」といった誤解をしている可能性がある。

以上のように、分からないことだらけなのだが、(3)カルバラ攻防戦におけるイラク軍の南下が、(4)のような指揮命令系統の乱れの結果であると考えれば、イラク軍の状況はかなり末期的といえる。いずれにせよ、この戦争の山場は近そうだ。

フランスの路線変更

今週は国際政治情勢においても大きな変化があった。ドビルパン仏外相は4月1日夜、「仏はイラク戦争で米国と英国の側に立つ」と発言し、開戦後初めて米英支持を明確に表明した。同

² 4月11日朝時点の情報では、さらにバグダッドに近いサダム国際空港の攻略が始まっている模様。

外相は、フセイン政権を「残酷で独裁的な政権である」とも指摘。イラク戦争をできる限り早期に終結させ、犠牲を最小限にとどめることがもっとも重要であると訴えた。

国連での第2決議をめぐるフランスの動向に関しては、多くの人が（本誌も含めて）「最後は降りるだろう」と読み違えた。小泉首相が3月上旬まで「国連決議があれば支持」と繰り返したのも、外務省がフランスの出方を見誤った結果だったのであろう。

フランス外交は伝統的に、「超大国の出現を阻止する」という強い意思がある。しかしそれと同時に、「自国の国益を重視する」ことにかけても貪欲である。イラクの戦後復興に関与することはもちろん、国連の機能麻痺を回避することは、フランスにとって必要不可欠な国益である。したがって、どこかで反米の旗は降ろさざるを得なかった。今回の路線変更は、エイプリルフールの日に発表するとは念の入った芸の細かさだが、それは別にしてもタイミングが「鮮やか」の一語に尽きる。

ひとつは、翌4月3日からパウエル国務長官がブリュッセルに入り、EUやNAFTAとの協議を始めること。パウエルは国連を舞台とした外交において、ほとんど外遊をしなかった。米国の第2の国連決議を取れなかった理由のひとつがそれではないかという議論は、The Economist誌などにもあった。

しかし、その陰には「パウエルがワシントンに留守にした瞬間に、政権内部で何が起ころるか分からない」という内部事情があった。なにしろパウエルが対欧州工作をやっている最中に、ラムズフェルド国防長官は後ろから「古い欧州」などという言葉投げつけて、独仏の神経を逆なでするようなことを平気でやっていた。パウエルとしては、「自分が背中を見せた瞬間に、ホワイトハウスがタカ派に乗っ取られる」という危惧を抱いていたのだらうと思う。

その点、現在のワシントンではラムズフェルドに対する風当たりが強い。ラムズフェルドの秘蔵っ子リチャード・パールも、グローバル・クロッシング社への口利き疑惑を追及されて詰め腹を切られた。なにしろパールは、「イラクの反体制派は、米軍の支援があればすぐに立ち上がる」などといった超楽観予測を振りまいていたこともあり、同情の声はほとんど聞かれない。タカ派としては苦しい局面を迎えている。

逆にパウエルは、陸軍出身のベテランだけに、戦局にも甘い予想をしていなかった。今や「戦場では私の教え子たちが頑張っている」と意気軒昂である。少し前までは、パウエルは国連外交失敗の責任を取らされるという見方もあったが、少なくとも彼は安保理決議1441を通したし、米国内の戦争支持取り付けにも大いに役立った。今なら誰に憚ることなく、ワシントンにできる環境が整ったといえる。

欧州から見ても、現在のワシントン情勢は米国外交の単独主義的傾向をかわし、国際協調路線の修復を図るにはいいタイミングといえる。フランスとしては、そこで妥協のための地ならしをしているわけで、この辺の間合いの計り方は、まさに「あうんの呼吸」である。

米欧関係は長年連れ添った夫婦関係のようなものだけに、喧嘩の仕方も強烈だが、我慢のしどころもお互いによく分かっている。修復するときは意外と早そうだ。

風見鶏の叡智

もうひとつ、フランスは今週末あたりに戦局が大きく変わりそうだという感触を得たのではないだろうか。米英支持を宣言するには、戦争がワンサイドゲームになってからでは遅すぎる。そして前述の通り、今週末あたりが勝敗の帰趨を決する山場となる公算が高い。

韓国国会も4月2日、政府提出のイラク派兵に関する同意案を賛成多数で可決した。これで工兵部隊600人を主軸に医療部隊を含む約700人規模の非戦闘部隊を、イラク戦線に派遣することが正式に決まった。反戦運動の高まりの中で、盧武鉉大統領としては苦しいところではあったが、終わってみれば賛成179票、反対68票の圧倒的多数で可決された。

これに続くように、4月2日にはロシアのプーチン大統領が「米国の敗北を望まない」と語り、開戦後初めて対米融和の姿勢を示した。「イラクへの攻撃は国際法違反であり、政治的な過ちだ」という路線から大きな転換といえる。同日、ドイツのフィッシャー外相も、ストロー英外相との会談に先立ち、「フセイン政権の早期崩壊を望む」と発言した。フランス、ロシア、ドイツと、じょじょに対米融和の流れはできつつあるように見える。

いささか脇道にそれるが、フランスといい韓国といい、やはり自前の諜報機関を持っている国は風向きを見るに敏感である。そうでないと変幻自在な外交は不可能だ。

それではわが日本は？といえば、小泉首相はブッシュがイラクに対して最後通牒を投げかけた3月18日午前10時（日本時間）のわずか3時間後、首相官邸での記者団のインタビューに対して、「米国が英国など各国と共同して武力行使に踏み切った場合、日本政府としてはこの決断を支持します」と表明している。開戦以前の対米支持宣言は、いろんな意味で突出していたことも事実だが、軍事的な負担を伴わない単なるモラル・サポートとしては、これ以上ないくらいに米国に高く売りつけたことも確かである。

米国が当初に発表した45カ国の"Coalition Members"には、米英以外のG7国は日本とイタリアしか入っておらず、カナダやメキシコさえ入っていなかった。米国は、以下のような文言で"Coalition"の規模を誇ったが、仮に日本が参加していなければ、これらの数字もいささか寂しいものになっていたはずである。

The population of Coalition countries is approximately 1.17 billion people.

Coalition countries have a combined GDP of approximately \$21.8 trillion.

いってみれば、日本は最初から対米支持に「決めうち」をした形になっている。風見鶏の能力がないのであるから、賢明な態度であったといえるかもしれない。小泉首相は同日のインタビューで、「日米関係の信頼性を損なうことは、日本の国益に反する」とも言っている。あえて北朝鮮問題をエクスキューズに使わなかったことも、金正日に間違ったメッセージを送らないという意味で正しい態度だったといえよう。

共和党内の不協和音？

さて、気になるのはワシントン情勢である。

渦中の人、ラムズフェルド国防長官に対しては、「戦前の予想が楽観的すぎた」、「制服組との間に軋轢がある」、「現場が申請した兵力を減らそうとした」、といった批判が相次いでいる。ペンタゴンのトップと制服組の間で、対イラク作戦に対する齟齬があったことは、これまではあまり表面化することがなかった。しかし本誌の1月17日号、1月24日号で紹介したように、ラムズフェルド国防長官と米空軍は、「今回のイラク攻撃はせいぜい米2個師団と英1旅団を中心に全体として5万人規模で問題ない」という大胆な計画を立てていた。ノンストップ空爆の援護を受けながら、クウェートからバグダッドまで一気に攻め込むと、米軍がバグダッド郊外に到着した時点でクルド族やイスラム・シーア派たちが立ち上がってフセイン政権を倒す、という予想を前提にしていた。

しかし、空軍を除く米国防総省参謀部の軍幹部たちは、そうした電撃作戦に反発した。陸軍は最低でも4個師団、加えて海兵精鋭の上陸部隊を投入するなど大規模部隊が必要だと主張。その結論として、現行の25万人規模の攻撃準備が行われたわけである。フランクス司令官は陸軍出身で、実戦経験も豊かなだけに、空爆中心の計画や「ハイテク兵器の効果」に対しても懐疑的だったようだ。

蓋を開けてみたら、後者の方が正しかった。今となっては、しみじみ現場の意見を取り上げておいて良かった、というところだろう。

ともあれ、タカ派の「行け行け路線」は停滞を余儀なくされよう。ブッシュ大統領としても、スタンスをやや中道寄りに微調整することを迫られそうだ。以下のような最近の兆候は、共和党保守派の「鉄の結束」に、ほころびが出始めていることを示しているように思える。

- ・年頭に提案したブッシュ減税案が、下院は原案通り7260億ドルで可決したものの、上院はいったん6260億ドルにした修正案を可決した後、さらに3500億ドルに減額する修正案を採決した。この間、共和党議員3人が賛成に回っている。2001年春の「ジェフォーズ上院議員の離党」（穏健派共和党員の造反劇）を思い出させるような展開だ。財政保守主義を唱える共和党議員は少なくないので、同様な「造反」はこれからも続くかもしれない。
- ・共和党内で一定の勢力を持っているリバタリアン派が、現政権への懐疑的な姿勢を深めていること。リバタリアンとは、政府の干渉を最小限にしようとする自由主義者で、「小さな政府」「寛容な社会政策」「不干涉主義外交」を主張する。イラクへの武力行使や過度のテロ対策は、彼らの基本的主張と相容れない。
- ・パット・ブキャンのような伝統的超保守主義者が、ネオ・コン派に対する批判をエスカレートさせている。近親憎悪や反ユダヤ主義も手伝って、ブキャンのネオ・コン批判はリベラル派の批判以上の激しさである。

< 最近の”New York Times”から >

”Scorecard for the War” By Thomas L. Freidman

March 26th 2003

「戦争のための星取表」(トマス・フリードマン)

* 今週は気分を変えて、ニューヨークタイムズ紙のコラムを紹介します。フリードマンはグローバルリズムを提唱する共和党支持者。こういう見方もあるようです。

< 要約 >

シカゴ空港の日曜日、酒場にある2つのテレビでは、NCAAバスケットとイラク戦争を放映していた。人々が見ていたのは前者である。バスケットの方が、勝敗がはっきりしているからだろう。われわれは戦争に勝っているかどうか、6つの星取表を作ってみた。

バグダッドを占領できるか。この戦争はフセインを武装解除するだけでは済まない。まっとうで計算可能な政府に取り替えることが必要だ。そうすればイラクは安定し、第二のサダムは現れなくなる。米英軍が首都を制圧しない限り、そんなことは不可能である。

サダムを消すことができるか。ブッシュは「ただ一人を狙う戦争ではない」と言うが、ナンセンスだ。もう12年も、ただ一人を追いかけているのではないか。独裁者の鉄拳の下で30年も暮らしてきたイラク人たちは、言いたいことも言えない状態だ。彼が再起する可能性を排除する必要がある。(亡命による平和的な取引の可能性は排除しない)。

イラク軍に対して、なぜこんな戦争をしなければならないかを説明できるか。サダムのエリート部隊はどうなるのか。スンニ派はシーア派の支配下に置かれるのか。イラク人はあくまで外国の軍隊に逆らうのか。これらの問いに答えることは、イラク再建に必要不可欠である。独裁者も嫌だが外国による占領も嫌、という事例はアラブではめずらしくない。戦争に勝ってイラクの領土を守れるか。クルド人やトルコ人が北部の領土を掠めたがっている。ブッシュ・チームはイラクの統一を保持するといっており、しっかりこう言っておいた方がいい。「トルコ人は来るな、クルド人は別れるな」

米国の占領下から、国を導くべき正統でリベラルな愛国者が生まれるか。ポスト・フセインをあれこれ言う声もあるが、サダムの支配下を逃げ出したような人物ではなく、圧政にも外国の支配にも反対するような骨のある人物でないと、イラクを効果的に治めることはできまい。次のリーダーに性急にイスラエルと和解させようとしたり、リチャード・パールの仲良しさんを押し付けようとするならば、そんな人物は国民に根づかないだろう。新しいイラクの正統性を、近隣のアラブ・イスラム諸国が認めるかどうか。ポストフセイン政権の持続力を考えるとこの点は重要だ。国連の関与がないだけに、周辺国は「あいつは気に入らないが、米国がやることだから仕方がない」と言うだろう。それではまずい。

もしこれらのことが起きているのなら、戦争を始めた政治目的は達成されたことになる。そうでなければ、われわれは砂あらしの中で迷子になっているのであろう。

< From the Editor > 天王山の戦い？

4月10日夕刻時点のニュースによれば、イラク側の2個師団がほぼ壊滅した様子です。どうにも理解に苦しむのは、なんでイラク側は虎の子の機甲師団を南下させたのかということです。制空権は米英側が握っているのですから、各個撃破されるに決まっている。しかも先方はいくらでも後続部隊があるが、自分たちは補給がきかない。こんな劣勢の勝負は、大山十五世名人がいう「いちばん相手の嫌がる手を指せ」の原則に従い、バグダッドに立てこもって主力部隊を温存するのが正解だったと思います。

この図式、どっかで見たことがあると気がつきました。戦国時代の「山崎の合戦」（1582年）です。羽柴秀吉の軍勢は「中国大返し」で大坂から京都を目指す。「本能寺の仇討ち」という大義名分があるから、士気はむちゃくちゃ高い。反対に明智光秀軍は、兵力が劣勢な上に意気も上がらない。このとき、光秀軍はどういう理由か山崎まで南下して来た。隘路で迎え撃つという作戦だったのかもしれないが、京都で粘った方が良かったと思う。京都で市街戦となったら、双方ともきれいな戦いはできなくなる。天下分け目の戦いが山崎になったことで、秀吉は快哉を叫んだことだろう。

光秀は生涯を通じて、相当な戦略家であり、政治家でもある。ところが本能寺の変以後は、何をしていたのかサッパリ分からない。安土城を燃やしてしまった理由も不明なら、どういう政権を作ろうとしていたかも不明。いわゆる「三日天下」（本当は10日以上あった）の間、光秀は呆然と日々を過ごし、「秀吉来たる」の報に驚いて、あまり良く考えずに軍勢を集めて、闇雲に前に出て来たように見える。

光秀に比べると、フセインはお世辞にも戦争が上手な人間ではない。イランが相手でも、クウェートが相手でも、アメリカが相手でも、いつも粗雑に構えて、最後は失敗している。今度のカルバラ攻防戦にどんな意図があったのか、あんまり考えてもしょうがないような気がします。大きな星を落としたことは否定できないようです。

余談ながら、山崎の合戦はすぐ近くの山の名前を取って、別名「天王山の戦い」とも呼ばれます。「天下分け目の天王山」という言葉は、たしかここから出ているはず。さて、要衝カルバラの制圧は、イラク戦の天王山になったかどうか。

編集者敬白

- 本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、日商岩井株式会社および株式会社日商岩井総合研究所の見解を示すものではありません。ご要望、問い合わせ等は下記までお願いします。

〒135-8655 東京都港区台場 2-3-1 <http://www.niri.co.jp>

日商岩井総合研究所 吉崎達彦 TEL: (03)5520-2195 FAX: (03)5520-2183

E-MAIL: yoshizaki.tatsuhiko@nisshoiwai.com